

(第16図) 塊状硫化鉄 珪鉄 石膏鉄よりなっている。鉄床の上部はヤケになっているが その直下は二次富化を受けており 銅藍 砒四面銅鉄 重晶石その他からなっている。初生の鉄物は黒鉄鉄床と類似しているが硫砒銅鉄を多く含み黄銅鉄にやや乏しいという特徴がある。金銀の品位は日本の黒鉄に比べてもやや低く平均 Au 1.5 g/ton Ag 470 g/ton 程度と考えられている。

以上フィジー諸島の金鉄床について早足で概観して来たが ポーフイリー銅鉄床やアルカリ岩に伴なう鉄床など日本には見られないタイプが存在する。特にエンペラー鉄山と やはりアルカリ玄武岩よりなるカルデラ中に胚胎するリヒール島の鉄床の類似は注目に値する。現在フィジーではオーストラリア ニュージールランド等の探鉱会社が活動しているが カルデラ構造を探し出して3 四目のドジョウをねらっている様である。

最後に 筆者らのフィジー訪問の機会を作って下さった ESCAP の高橋清氏 各種の資料を下されたフィジー鉄物資源省の各位および草稿を読まれた奥田義久氏に感謝したい。

文 献

Ahmad, M., Solomon, M. and Walshe, J. L. (1987) Mineralogical and geochemical studies of the Emperor gold telluride deposit, Fiji. *Econ. Geol.* v. 82, p. 345-

370.  
 Colley, H. (1976) Mineral deposits of Fiji (Metallic deposits). Mem. no. 1, Mineral Res Div., Fiji, 123 p.  
 Colley, H. and Rice, C. M. (1976) A Kuroko-Eype ore deposit in Fiji. *Econ. Geol.* v. 70, p. 1373-1386.  
 Colley, H. and Rice, C. M. (1978) Kuroko-type deposits in Vanua Levu, Fiji. *N. Z. Jour. Geol. Geophy.* v. 21, p. 277-285.  
 Colley, H. and Greenbaum, D. (1980) The mineral deposits and metallogenesis of the Fiji platform. *Econ. Geol.* v. 75, p. 807-827.  
 Gill, I. B. and Stork, A. L. (1979) Miocene low-K dacites and trondhjemites of Fiji. *Trondhjemites, dacites, and related rocks.* Develop. Petrol. no. 6, p. 629-649.  
 Ibbotson, P. (1967) Petrology of the Tavua caldera, Tavua gold field. *Fiji Geol. Surv. Mem.* 3, p. 59  
 Sillitoe, R. H. (1988) Gold deposits in western Pacific island arcs: The magmatic connection. *Proc. Bicentennial Gold 88* (in press).  
 Taylor, G. (1987) Breccia formation and its relation to gold mineralization at mount Kasi, Fiji. *Proc. Pacific Rim Congr.* p. 597-601.  
 Woodall, R. (1988) Gold in 1988. *Bicentennial Gold 88, Extended Abst. Oral Prog. Geol. Soc. Australia Inc.* no. 22, p. 1-12.  
 山田亮一・西谷義興・谷村昭二郎・小西尚俊 (1988) 温川鉄床の現況と開発後の知見. *鉄山地質* v. 38, p. 309-322.

最近中国で発見された新鉄床

岸 本 文 男 (地質相談所)  
 Fumio KISHIMOTO

泗頂鉛・亜鉛鉄山18年延命

広西壮族自治区泗頂鉛・亜鉛鉄山は鉄区内の探鉄と周囲の地質調査を強化し 絶えず鉄量を増やしている。

最近 入手された資料は 泗頂・古丹両鉄区で新たに増えた可採鉄量が 362 万 t に達し 同鉄山の稼行期間が18 年伸び 鉄区の発展の展望は大きく広がった。

もともとの鉄山の設計からすると 計画稼行期間は17 年で 1960年に生産を開始してからすでに計画年限を10 年超過している。しかし 泗頂一帯の地質構造の状態から 404 探査隊は“類似する鉛・亜鉛鉄区に照らした泗頂鉄床新鉄床の探査・発見の可能性”を分析し その報告書を提出した。そのため 同鉄山は資金 150 万円を投じて まず泗頂鉄区の範囲内の鉄体周辺の探査を進め 127 万 t の鉄量を新たに把握した。1977年には60人ほどからなる試錐隊を組織して古丹鉄区の周縁で探査試錐を開始し 8 年半の努力を積み重ねて野外調査・探査

を基本的に終了して最終的な地質調査・鉄床探査報告をまとめた。この報告によると 古丹鉄区では2,356,000 t の地質鉄量が把握され その鉛・亜鉛金属量は109,000 t に達し 品位は稼行規準を満たし 同鉄山の生産拠点を替える問題は解決し その依拠すべき鉄物資源を確保した。 尹華勤 黄扈文 (中国地質報 1986. 12. 19)

郴県で一潜頭鉛-亜鉛鉄床

湖南省地質鉄産局の地球物理探査隊は 郴県后壩の天字号で一つの潜頭鉛-亜鉛鉄床を探査・把握した。その賦存深度は地表下 45-174m である。この鉄床は面積 0.2-0.3km<sup>2</sup> の中-低磁気異常を精査して発見されたものである。七本の試錐が打たれ いずれも 1-2 層の鉛-亜鉛鉄床を把握した。鉄体は層状もしくは層状に近く一般に厚さが 2-3 m 走向延長が 400m 傾斜延長が 200 m に達している。 嚴欣耀 (中国地質報 1986. 5. 26)